

総務の袴田君が
実は肉食だった話聞く!?

Emu & Yuta

花咲菊

Kiku Hanasaki

termity



エタニティ文庫

目次

総務の袴田君が実は肉食だった話聞く!?

5

書き下ろし番外編

袴田君とティーカップ

343

総務の袴田君が

実は肉食だった話聞く!?

第一章 それは総務の袴田君

絶体絶命って四字熟語は、アニメやマンガの主人公が窮地きつうちに追いやられた時に使う言葉だと思っていた。目が覚めて、私はその窮地きつうちという見知らぬ土地に立っている。こんな二十七歳の、出るとこ出でない平凡OLの私が使う言葉じゃないと思います、神様!!

ねえ神様!! 教えて?

ここはどこ?! それで隣で私に背中向けて寝てるこの人は誰?! そんなでどうして部屋がこんな汚いの? 泥棒にでも入られたの!? あの山は何? ゴミ? 貝塚? え、じゃあこの人古代人?

背中見てもまったく答えは出さず! とりあえず頭痛いから、眉間もみもみ。

しかも裸。繰り返し返す、しかも、私も男も裸なのである。事後みたくなってしまうのである。

下着は着けてたからベッドから下りて、落ちてた服そとと取って、音立てないで着た。

いや、ちょっと待てよ、もっかい寝て起きたら家のベッドだった的な、ミラクルな現象に……………

なんないから。サツと寝て起きてみたけど二度手間!!

過ちは過ちだから、どうにかしないとですよ。もういい年した大人ですからね、現実逃避はよくないですね。

男は寝息だけを響かせて、とても気持ちよさそうです。時刻は午前五時です。

吹き出物が一切ない、男の綺麗な背中をじっと見つめてたら選択肢が浮かんできた。

【何食わぬ顔で彼女面してみる】

【見ぬふりならぬ、なかったことにする】

【消す】

【悲劇のヒロインぶって泣いてみる】

【消す】

【もっかい寝る】

待って待って、不穏な選択肢が二回も出てる!

ちよっと周り見渡したけど……………うーん武器になりそうなものは……………いや、こんな汚部屋おべやのもの何も触りたくないな。そうなると武器は……………

自分の両手を見てワナワナしてしまった。こ、これは武者震むしゃふるいよ……………! この無防備

な状態なら、女の私でもできるはず!!

い、いや、やめとこ! 勢いでお母さんとお父さんの涙を見たくない!!

それでのの……本当に誰だこの人。私は彼と昨夜何をしてしまったんだ、全然思ひ出せないけど……!

昨日の夜は………確か会社の飲み会だった。

はい記憶終了。

ヤバくない? それしか覚えてないよ……記憶飛ぶほど飲んだっけ。

でも、ちよつと待って。この黒髪もしかして……

あれ? もしかして………

いや、ごめん。

全然思いつかないんだけど!

でもよ? もしも営業のまままあイケてる社員様だったら、ラッキーじゃないですか

ね、これは!

最後にちよつと、ちよつとだけよ?

お顔見て帰ってもよろしいかしら? 場合によっては朝ご飯作って、彼女面かのじむづらしている

かしら?!

神様お願い、桐生さんきりう(営業トップ)!! 神様お願い桐生さん(営業トップ)!! 神

様お願い桐生さん(営業トップ)!! 桐生さん(営業トップ)!! 桐生さん(営業トッ

プ)!! 営業トップ!!

ベッドに乗って顔を覗のぞきにいったら……

「んっ……」

まさかの艶つやっぽい声を出しながら黒い頭が揺れて、家主は私のほうを向いた。

うおおおおおおお!!!

袴田君かあああ………!!!

まあ、髪と体格から桐生さんじゃないってことくらい、わかってたけどさ!

うわあ……総務の袴田君………えええええええ、話したことないい。

えっと、待って……は、袴田君の情報は……総務で……二年前に会社に来て……うん、

それだけ!

でもあの……寝息を立てる袴田君は思ってたより綺麗な顔してる……会社では草食

眼鏡めがねって感じなのに……え? この人にいろいろされ……?

う、う、う!!!

はい解散!! 撤収!!!

「お先に失礼します」

超小さな声で言って荷物を持って、私は一目散に袴田君の部屋をあとにしたのだった。

とりあえず家に帰って二度寝した。今日土曜日でよかった。

昼過ぎに起きた頃には頭もスッキリしてたし、見慣れた部屋での目覚めは最高だった。紅茶でも飲も……

ポットのお湯が沸くまで、スマホを弄いじってみる。友達からメッセージが来てるくらいで、特に変わったことはなかった。

袴田君の連絡先も入ってなかったし（よかった）、もちろん桐生さんの連絡先も入ってなかった（くっそ）。

うんだって、本当に何もなかったしね☆ うふ。

マジ、あれ夢だったんじゃない？

と覚えてきた……ああ、うん夢でいいや。

お湯が沸いたからティーポットにお湯を注そそいで蓋ふたをして、蒸らす間、今度は郵便物を眺めてみた。

近くにできたジムにピザや寿司、マンションやスーパリーのチラシ……それと、区だより……………

「あ」

尾台おたい絵夢えむ様。おお、やっと私宛の郵便物だ。そして、そのハガキに溜め息なんて出てしまった。

「あああ……そう、夏奈子かみなこ結婚したんだ。オメデト」

苗字みなじが変わった大学の友人からのハガキの裏には、結婚式の写真がプリントされてた。しかも何これハワイ？ 海外挙式？ 呼ばれてないけどあれかな、身内だけでやったのかな。だって夏奈子仲良かったから呼んでくれてるはずだし。

え、仲良かったと思ってるの、私だけパターン？

結婚するほどの恋人がいたって知らなかったし、最後のやりとりはお正月だったかな？ 年賀状のやりとりはしたよね、ん？ 仲……………良いよねえ？

……………うっそやだ、やめよ！ やめよ！ い、忙しかったんだよきつと！ うんそう！

携帯持って、やっぱり置いて。ハガキ来たんだから私もお返事書いて、何かプレゼントでも贈ろ。

紅茶一口飲んだ……うわ、すっぱ!! ああこれハイビスカス入ってるんだっけ、すごい酸すっぱっぱい。でも、いつもより酸味五割増しくらいに感じる。

ソファーに座って窓を見た。雲一つないカラッとした晴天で、それなのに洗濯物すら干してないベランダって……………

ヤバイな、この世界に一人ぼっち感ヤッバイ！ でも特に予定もない！

だがしかし寂しくもない私、最強!!

結婚したいなうとは思わないんだけど、結婚したいくらい好きな人いるのは、いなーと思う。

結婚したら、今まで一人で使ってた時間を他人と共有しなきゃなんないわけで。好き勝手できないし、ズボラな姿見せて幻滅げんめつされてもやだから、常にちゃんとしなきゃならないよねえ？

そんなの耐えられない！ っと思うんだけど、きつと違うんだよね。

だって、ずっと一緒にいたいくらい好きな人だから結婚するんだもんなあ。共有しなきゃいけない、とかそういう気持ちじゃないんだ、きつと。私のことわかってもらいたいし、相手のこともわかりたい。一緒にいるのが楽しくて楽しくて仕方ない。そんな相手だから結婚するんでしょ。

いいなあ。そんな人、出会ってみたいなあ。

でも私まだ彼氏いない歴〓年齢だしな。

……………ああ、そうか。

すごいことに気がついて、顔を両手で覆おおった。

私は記憶もなのまま乙女散らしちゃったつて!? 袴田君で!?

ないないないないない!

うん、ない!

なかったことになってるからノーカンです。

いやでもさ、『わたくし殿方のために初めては温めておきましたの。キラツ☆』とか今時重たいよね？ 金曜日でしたまにはワンナイトラブもいいよね！ みたいな感性がなかったから、処女ぢよ拗こじらせたわけだし。

うん、だからこれでよかったのよ!! だって私はもう二十七歳の立派な大人（涙目）。泣いてないです！ これはあれ、生き別れの弟を思い出しただけよ（姉しかいない）。

そして私は何もせずに……いやゲームして大好きなTL漫画読んで（調教と服従で検索する）、土曜日を終わってしまった……現実逃避ではないです、現実から逃避なんて不可能ですから。

そして迎えた、日曜日。まあ目立ったイベントもないもんで。

いつもどおり、午前中はヨガに行く（いろんな体位ができるよう柔軟な体作りを心がけてます！ ちなみにこの体を使いそうな予定はなし。いや使ったのかな……うううう、助けて）。

レッスンを終えて、毎週会う、同じようなアラサー独身の顔見知りたちに挨拶あいさつする。ヨガスタジオのシャワー浴びたあと、なんだか最近、化粧のりが前と違うんだよなあって化粧水パツティングしながら思った。

入れ！ 入れ!! 私の角質層かくしつそうの奥深くまで染み込め化粧水!! 多分、皆もそう思いな

がらやってるはず……！

鏡を見て、全然綺麗になつてなくて溜め息だ………エッチすると綺麗になるんじゃないのかよ、神様嘘つきすぎ！

そこには四流私大卒、二十七歳、営業事務の冴えない私が映っていた。

勉強得意じゃなかったけど大学行けて親がうるさかったから、行けるとこに行つた。得意なものも特にない。

顔は普通。インパクトはないけど、顔のせいで人を不快にさせたことはないかな。

化粧したら化けると無責任に言われて、本気で化粧したら歌舞伎役者みたいになつたから、いつもナチュラルメイク。

体形は………食にこだわらないから普通。

髪は伸ばしてる、輪郭隠せるから。前髪は作ってない、風吹くたびに直すの面倒臭いから。

笑顔は頑張ってる、こんな私が無愛想にしてたら救いようがないから。

背筋は伸ばすようにしてる、少しでも印象をよく見せたいから。

話はしっかり聞くようにしてる、私は面白いことが言えないから。

何に対しても否定しないようにしてる、私が否定されるのが怖いから。

そして、私みたいのを陰キヤラ、通称『陰キヤ』と言うらしい。

へえ悪くないな陰キヤ。実は陰でクラス操ってそうじゃん、私には全然そんな能力ないけど。

趣味は………実はこないだまであつたけど、卒業した。

それは時間が経つにつれ、ゆっくり黒歴史になりつつある。もう絶対あの世界には戻らないんだけど、未だに段ボールに入ってるその痕跡を、なかなか捨てられないでいる。

……まあ、そんなことを考えてもしょうがないんだけどね。

さっとパウダー叩いてヨガスタジオを出た。

午後は一週間分の買い物だ。

会社帰りにちよっとコンビニ、くらいはいいいけど、スーパーまで寄るのは面倒臭いし、それから帰って料理なんてやってらんない。

でも毎日外食したら安月給OLの私じゃ有料ゲームでできなくなってしまうから、節約するに越したことはない。

だから食材をまとめて安いスーパーで買って、日曜に作り置きしてる。

今日も何作ろうかなーっていろいろ買って帰ってきて、狭い玄関を通ろうとしたら、置いといた段ボールにつまずいて舌打ちしてしまった。

段ボールが倒れて、中からウィッグと衣装が投げ出される。

………見なかったことにして部屋に入った。これが私の黒歴史。

趣味は………多分二年前に聞かれたら、笑顔で「コスプレです！」って答えたかな。すごいんだよ？ 陰キャの私が、本当に魔法にかけられたみたいに変身できるんだ！ テーピング使ったら骨格も変えられるし、たくさん持ってたメイク道具で、好きな顔になれた。服だって作ってた。すごく楽しかった。

生まれ変わったような瞬間が快感で、このために生きてるってレベルだった。カメラのフラッシュが気持ちいいんだ。ファンだっていっぱいいたし、私しか撮らないうって言ってたカメラマン様だったんだからね。

「にやんにやん」って痛い名前だったけど、私がやるポーズは「にやんにやんポーズ」って流行ったりもしたんだよ！（うん、恥ずか死ぬる）

でも、私を師匠師匠って崇拜してくれてた子に、SNSの裏アカアカウントで【いい年して魔法少女とか、マジでキメエ。さっさと引退しろ】って陰口言われてるの見て、やめてしまった。

その子、私より一回り若いんだけど、他の人もそう思ってたらどーしようって、いたたまれなくなってしまうってな！

裏アカ見た瞬間は悲しかったかな？ 怒りとかはなくて、はあマジかって溜め息ついて、私にまつわるすべてのアカウントを消去した。

メイク教えてあげたり、一緒に服作ったり、妹みたいに思ってたんだけどね。何か気

に障るさわことでもしちやったのかな。今となってはわからない。

まあ、あのままやっても引き際がわからなかったし、これでよかったんだと思う！ 思い入れのあるキャラクターだったから、どうしてもやりたくてね。でも、いつまでも魔法少女だなんて、私がおかしかったんだ。

年齢に応じたコスプレってあるんだけど、まだ今年はできるんじゃないかなって無理してやってたのも事実、キモイって言われてたのが現実。

誰にも何も告げずに、にやんにやん氏は突然消えていなくなってる………

そのままあの世界には、まったく触れてない。けれど後悔はしていない。

冷蔵庫に食材をしまっって、一週間の大体の配分考えながらちよとした夕飯を作ってた。明日のお弁当の下拵しもじろえも済んだし、ゲームして寝よ寝よ。おやすみなさい。

で、月曜日。さらに一日経ったら金曜日の袴田君なんかすっかり忘れていた。

我ながらなんだよこの性格は、と思う。

ただ、世間で言う『さとり世代』な私は、ネガティブなことがあっても「仕方ない」で済ませるように、脳が勝手に働いてしまうんだよね。生まれた時から大変な世の中だったし、みたいな。

だってもう、やっちゃったものは仕方ないじゃんか。

落ち込んだって愚痴零ぐちこぼしたって励はげまされたって、結局私が立ち上がらないといけないわけ。

だったらはじめから悪いほうに捉とらえなければ万ばん事解決しかいけつつしよ！
 起きて、顔洗顔を洗うって、さあメイクくメイクくって思おもったら……………

う、う、う、嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘!!

うっそでしょ!!メイクポーチがないんだけど……………!

え?嘘、なんでなんで?

休みはちよつと眉描まゆかきくのとパウダーくらいだから、家にある予備よびので済すませて、気づかんかった…………

やだ、落とした?落としたのかなあ。

コスプレやめてから、私の楽しみといえは、新作のコスメ買ってニヤニヤすることだったのに!(結局使つかわず誰たれかにあげる)

百貨店のカウンターでお姉さんにお化粧けいじやうしてもらってお話しして、買って外とまでお見送りお見送りしてもらうの大好きで、給料注つぎぎ込んでる二十七歳。

あのポーチこの夏限定なつげんていのだったし、中身あわせて総額そうがく五万くらいしたんだけど……………シヨック。

いや、落とした私が悪いんだけどさ。

まあ、しょうがないか。神様がこれを機きにプチプラコスメにしなさいって勧すすめてんのもかもしれない。ああそうですか、そうしますよ、私の顔はプチプラですね。

……………あ?

ちよつとやな予感よかんする。

もしかして、もしかして神様。袴田君の家に忘れてきたなんてこたあーないですよね?

だって、袴田君ちなんて行ったことない!

パスケースも財布も入いってたから、バッグの中身あんまり確認かくんせずしに帰かえっちゃったんだよなあ。

え……………袴田君ち?

うわああ……………マジですか。

とりあえず、ここでウダウダ考えても仕方ないし、予備よびのメイク道具道具でそれなりに顔作つくって、会社かいしゃ行くか。

メイク終わおわりらせて家いえを出でて、電車乗のりって会社かいしゃに着きいて、いつもどおり制服着替かえて、皆みなにニコニコ尾台おしだいです!

私は始業しぎやうの三十分前さんじふぶんまえにはデスクについて、着替かえもあるから会社かいしゃには一時間前いちじかんまえには来きてる。営業えいぎやうさんのスケジュールチェックしたりお花はなにお水みづあげたり、ゴミ出しもしな

きやいけないから。私が好きでしてることだけだね。それ全部終わらせたなら、営業さんがデスクに来た。

「尾台さん、新しい商材の顧客向けの資料作ってもらっていいかな。ちょっと急ぎで」「はい、わかりました」

パソコンのキーボード打つ手を止めて、笑顔で封筒を受け取った。中身取り出してデータ確認する。ああこれなら前に同じような資料作ったからフォーマットがあるな、と頷いた。

私の働いている会社は、株式会社グロリアス・デイズ・カンパニー、通称GDC。各地にある映像制作会社と動画サイトやテレビ局などを仲介する、映像の代理営業を主な事業としている企業だ。

会社の場所は御茶ノ水で、建物は古め。うちの会社の名前だけ言われても皆「？」って感じだろうけど、親会社は株式会社三神企画って聞けば、誰でも「おおっ!!」と驚くのだ。

三神企画は世界累計利用者数が四千万人を突破したアプリゲームの開発に、若者に人気の動画配信サイト運営、映画の配給に……と、幅広くエンターテインメント事業を展開している超有名、優良企業だ。

会長がテレビで特集されたこともあるし、就職したい企業ランキングでも常に上位を

キープしている。

まあ、私が働いているのは、その子会社の営業事務ですけどね。でもうちの会社もずっと黒字経営なんだぞ。

仕事は特別できるほうではないけど、社員同士仲が良く、フォローしあえる関係だから、手一杯で連続深夜残業って日はない。

まあ仲が良いのは、一人を除いてだけ……

「尾台さん、こっちのファイルのチェックもお願ひね」

さあ資料を作ろうと思ったらデスクにドサツとファイルを置かれて、二時間はかかりそうな量に笑顔が固まる。

「え……」

「私、大事な用があるから、午後までには済ませておいてちょうだい」

「でも、ちょうど今……」

「はあ?」

そう。私を威圧的な態度で睨む、この葛西さんという営業事務のお局が、ちょっと曲者。

初めて会った時の葛西さんは、それはもうやりたい放題で営業部を牛耳っていた。

気分次第で仕事をしたりしなかったり。機嫌が悪い時は誰も話しかけられない。お昼

休みは時間どおりに帰って来ないのは当たり前、しかもそのお昼ご飯代を部下の個人指導とか適当な理由をつけて、領収書切ってた。備品も勝手に持って帰るし全然ルール守らない人だったんだけど、会社の創業時からいる人で社長にも顔が利くから、誰も何も言えなかった。

気に入らないことがあれば、周りに当たり散らすし、小さなことでグチグチ……
まるで、ドラマの悪役のような人だった。

右も左もわからなかった五年前の入社時、私は葛西さんの下につけられた。初めて会った時、葛西さんは私を頭の前から足の先まで見てこう言った。

『これは、使えなさそう……ハズレを引いてしまったわ』

いやな顔をされると反射的に「すみません」や「ごめんなさい」が出てしまう私は、それからお局の格好の餌食になってしまい、毎日ストレスの捌け口にされている。

そんなんで、堪え性のない私は入社早々、仕事辞めてもいーかなーって思ったけど、わずかながら味方いたし、今は後輩もいるし、ここで私がストッパーになれば他に被害者出ないかも、なんて意地張って今に至る。以前私の席に座っていた人は葛西さんのいびりのせいで三か月で辞めて、鬱にまでなったって……何をこんなに我慢する必要があるのって自分でもわからないし、べつにヒーローになりたいわけじゃないけど……

でもそれで営業の人や他の人の手が止まるくらいなら説教くらいって、私が引き受け

ちゃったりなんかして、本当私ってばか。

まあ、こんないやがらせなんていつものことだから諦めてるけど、今日月曜日か……
週はじめは忙しくなるし、時間取られたくないんだけど……

じっと考えてたら、葛西さんがイライラしながら口を開いた。

『『でも』、なんて言い訳してる暇があるなら、さっさと今してる仕事片づければいいでしょう』

「言い訳したつもりじゃ」

「じゃあ何？ 男からもらった仕事だけ受けるって？ 本当に尾台さんは媚を売るのだけはや得意ね」

わざとらしく耳元で小さな声で言われて、さっき受け取った封筒をつつかれる。

「そんな」

悔しいようなよくわかんない気持ち……でもここで言い返したら、話が長引いて仕事が進まないだけだし。

唇をぐっと噛んで「わかりました」って言おうとしたら。

「尾台さん」

「ん？」

いつも名前呼ばれたら大体誰だかわかるのに、その声は初めて。視線だけそっちに向

けたら………う、嘘!!

「お取り込み中すみません、総務部の袴田です。尾台さんに用があるのですが、ちょっとお借りしても?」

「え、ええ……私はべつに」

突然の袴田君の登場に葛西さんは少し引いてる。そして私はものすんごく引いてる。

「ありがとうございます。ああと……さっき聞こえたのですが、葛西さんの大事な用とは? 俺も彼女に特別な用事があるんです。でも、あなたの用事次第では彼女がこれを終わらせてからでないかと、俺と話ができませんよね?」

袴田君が長い指で机に置かれたファイルを指すと、葛西さんは慌ててファイルを抱きかかえた。

「終わったら呼びなさいよ」

「はい」

葛西さんは逃げるようにその場を去って、袴田君が残って……え? 助けてくれ……? え? えええ?

二人で葛西さんの背中を見送っていたんだけど、袴田君は眼鏡を押し上げながらすぐに私のほうを向いた。

「それすみません、尾台さん。これ……ちょっと確認してもらってもいいですか」

「ひッ!!」

一歩距離を詰められてビビる。っていうか何? なんで袴田君こっち来んの!? 怖い!!

「大事な用です」

「え? 確認って、なんで私? えっと、そのあの、あ、あのおはようございます」

「おはようございます。はいこれ、目を通してもらっていいですか」

また一歩詰め寄せられた。眼鏡がキラッと光ってる。

袴田雄太、二十八歳。

そう。あの、起きたら隣にいた総務の袴田君だ。

目が隠れそうな癖毛の前髪、さらにはその目すらも見えなくする黒縁の眼鏡。眼鏡のブリッジの下には高く筋の通った鼻がある。唇は薄いピンク。

あ、背高い、それで白い。初めてちゃんと正面から見たな、総務の袴田君。

正直こう、性の匂いが弱い感じの、T H E 草食系なんだけど、そんな方が……私と……裸で……うわわわあああ!!

皆が袴田君袴田君言うから存在だけは知ってたけど、こんな近くに来られたのは初めてだ。

黙っていたら、袴田君は脇に挟んでいた書類を私の前に出して、静かな声で言う。

「これ……」

「あ、はい！ すみませんなんですしよ」

左上がクリップで綴じられた書類を押しつけられて、見てみれば付箋が貼られて。受け取ってからそこに書いてあった言葉を読んで、息が詰まった。

「なんで勝手に帰ったんですか」

「!!!!」

ヤバイ！ 汗、汗出てくる！

袴田君、直立不動の姿勢崩さず！ 答えらんないから次のページ次のページ!!

【好きです】

無理！ 次！

【責任は取ります】

なanan、なんの話!? 次！

【結婚しましょう】

しません!!

「はははははきやまだ君！ これはちよつとダメだと思えますよ!! 相手の意見がまったく考慮されてませんし一方的すぎます！ もう一度見直………いやいやいや、なかったことにしましょう！ それがお互いのためです!!」

て言って、お腹に書類を突き返す。

「それこそ一方的すぎます」

袴田君は書類を顔のとこまで持ち上げると、最後のページをめくって見せてきた。

【探したのは俺の家にありますよ】

はい、終わった。

私を真っ直ぐ見て微動だにしない袴田君の前に、口から魂出していたら、私の席の後ろのほうから声が出た。

「袴田くん!! はーかーまーだーくーん!! まーた俺のパソコン動かなくなっちゃったよー袴田君ー!!」

袴田君はピクッと体を反応させて声のするほうを見ると、眼鏡を直した。

「何したんですか」

落ち着いた声で返事をして。

「何してないよ?」

という、とぼけた答えにも淡々と答える。

「何もしてないのに止まるわけじゃないでしょう、何しようとしたんですか」

「え? 書式を変えようと思ってあそこのアレのアレを押ししてみたんだけどさ」

「やっぱりしてるじゃないですか、今行きます。では尾台さんまた」

あっさり頭を下げて去っていく袴田君。私もその背中に頭を下げた。

「え？ あ、はい。さようなら（永久に）」

袴田君はこいこいされてるほうに行ってしまったよ……

私は気を取り直して仕事再開。

毎日至るところで聞こえる「袴田くん」の声。袴田君はいつもいろんな人に頼られてる。

総務部って会社によって請け負う業務の範囲が違うと思うんだけど、うちの会社の総務部は、なんでも屋みたくなってる。

皆、口癖が「じゃあ総務に聞か」とか、「なら総務に頼むか」になってて、なんでも総務総務言ってる。まあそれも、袴田君が来た二年前からの話だけ。

チラッて遠ざかっていく背中を見たら、高い声が聞こえて後ろから首に抱きつかれた。

「えったーん!! 本つ当にあのクソババーどうにかならないのかな、殴りたい」

振り返るといたのは、茶髪のマッシュボブのめぐちゃんこと久瀬恵。仕事もできるし、顔も可愛いバイトの子。私の下で働いてくれている。初めて指導してあげてって言われた子だから、誰かにめぐちゃんが褒められると私まで嬉しくなる。

まあ見た目は私とは対照的だから、仕事以外だと立場が逆転しますけどね、めぐちゃん

ん彼氏いますし。

めぐちゃんは二十四歳だから年も近いし話しやすいし、このまま正社員になってうちで働いてくれないかなーって思うくらい気が合う。

めぐちゃんは私を「えっちゃん」って愛称で呼ぶほど仲良くしてくれるし、いつも味方してくれるのは嬉しいけど、今日はちよっと荒ぶりすぎてて苦笑い。

「そういうのすぐ言っちゃダメだつてば」

「だってムカつくし。そろそろ一言言ってもいい？」

「ダメ、そんなことしたらクビになっちゃうよ？」

「だってさあああ!! ……………まあわかったよ。で？ なあーに、えっちゃん！ 袴田君と何かあったの？」

「ヒツ!! んんん……何かあったんかな、めぐちゃん」

首から離れためぐちゃんは少し不満の残った顔でこっちを見た。

「なーに？ 自分のことっしょ」

「あの……………えっと……………うん」

ちよっと沈黙……

やっぱこのままじゃいかんよな！ でも、袴田君のこと、自分じゃどうしていいかわからないし……飲み会……こないだのこと、まずはちゃんと思ひ出さないと。そっくだ、

はじめはめぐちゃんと一緒に飲んでたはず。

よし！ 心を決めて、いつも知らんぷりしてる飲み会の席での私の姿を聞いてみようかな。

下向いて深呼吸して、キリッとして顔上げてみた。

「あのさ……」

「ん？ えっちゃん？ どった？」

「君が行きたいって言ってたお店、予約してみたんだけど今夜一緒にどう？ 僕に優しくエスコートさせてくれない？（イケボ）」

「やだ〜朝からイケメンが誘ってくるんだけど〜。行く行く〜」

「新橋の立ち飲み屋でいい？」

そのままの調子で言ったら、ふんと顔を横に向けられてしまった。

「そこ予約いらんし。帰りまで時間あるんだから、写真映えしそ〜なところ、ちゃんと探してよね」

「はい喜んで」

急ぎの資料終わらせて昼休みにお店決めて（ちょっとおしゃれな、チーズたくさんある店）、午後葛西さんのファイルチェックやってたら仕事終わらなくなつて残業。でも、いつもさっさと定時で帰っちゃうくせに、めぐちゃんが手伝ってくれた。

「ありがとう！ めぐ様」

「いいいいいよ！ もっと大きな声で私の好感度上げてくれていいよ！」

「仕事！ 手伝つて！ くれて！ ありがとう!! 久瀬！ 恵さん!!」

「わざとやってるの？ 恥ずかしいからやめてよ、上司がさりげなく褒めるみたいな、そういうのよろしく」

「わかった、じゃあ言つて欲しいタイミングで合図して。そこでこっちの仕事もお願いいたします」

「何、明日の分もしれっと渡してんの？」

残念ながら明日の分は突き返されたけど、予約に間に合うように帰り支度だ。

どこに恋のチャンスがあるかわからないからね！ と会社を出る前にめぐちゃんは念入りにメイクを直していた。

私は、まあテカリ抑えるくらいでいいかなあ。だってメイク道具ないし……恋のチャンスは……あるか？ いるか？

二人で仕事やダイエツトの話をしながら到着したのは、おしゃれなバル。ネットの写真より雰囲気よくて、一人で外食できない私としてはすごい興奮した。

席に着いておすすめのワインを一本と、すぐ出てくるアラカルトを頼む。

お店の内装や窓の外を見てメイン決めるのちょっと悩んでたら、ワインと小さなチー

ズが運ばれてきた。

今日も頑張ったーってまだ月曜日だけど、とりあえず乾杯。飲みやすいワインを堪能してたらめぐちゃんが口を開いた。

「それで？ 私になんの用ですか？」

「ああ、えつと……」

今日聞きたいのはアレ、こないだの飲み会もだけど、私はちよいちよい記憶なくすくらい飲んでしまってるので、その時の様子なんか聞けるといいなあと思ってます。はい、もうそろそろ酒の飲み方気をつけます。

で、それ聞くとめぐちゃんはワインをクルクルしながら首を傾げた。

「飲み会の時のえつちゃん？」

私は頷く。

「そうそう、ほら私、お酒飲むとテンション上がっちゃって、気がついたら家帰ってきてるみたいなの多々なんだよね。化粧も落としてるし、ちゃんとベッドで寝てるし、苦情もないから気にしてなかったんだけど、私ってどんな感じ？」

言ったらめぐちゃんにニッコリされる。

「いい年した女がみつともないね☆」

「わかってるから!! 以後気をつけます！ すみません」

「まあ、えつちゃんが言うように、ハイテンションになって笑い上戸じょうごになってるよ。何話しても笑ってくれるから、おっさんどもに大人気。だから毎回飲み会にも誘われてるんじゃない？」

あんまりおかしなところはなにかあって思いながら、ワインに口つける。

「こないだも、私に甘えてスリスリしてきたよ。楽しいからいいけどね。でもモテないよねあれは」

「そっすか」

「まあ偉いとはは、あんだけ酔っぱらってもお持ち帰りされないとこだよね」

「ぶっ!!」

動揺しちゃってせっかく口に入れたワインを噴き出したんだけど、めぐちゃんはノーリアクションでチーズ切り分けていた。

せこせこテーブルを拭く私に、知らん顔でめぐちゃんは続ける。

「こないだの金曜日はねーまあいつもどおり私に甘えてきて二人で話してて……」

「はじめのほうは覚えてるよ。ビール飲みながら仕事の話してただけど、焼酎しょうちゅうと日本酒頼んだところへんから記憶が曖昧あまい」

「ああ、ちょうどそのくらいで席替えでもしようってなったんだよ。あの飲み会、全部署来てたでしょ？ いろんな部署の人と交流しようって。そしたら、えつちゃんとこに

開発部のお偉いさんが来てさ」

「え？ んん……開発って……あの、毛の薄い」

「ハゲなんていっぱいいるんだから、そんなの特徴になんないっつーの。村井さんね。で、村井さんがはあはあしながら、『尾台さんは下の名前、絵夢ちゃんって言うんだってね？ 可愛い〜名前だね〜』って言うって」

「あ、あ、あ……」

う〜ん、なんとなく想像つく。私の名前ってばいつもネタにされるから。

「ニヤニヤしながら、小さな声で『夜もエムなの？』って聞いてて」

「ヒイイイ………キモい……」

「そしたら、えっちゃんが笑いながら『総務の人お〜総務の人来てえ!!』って」

「え？」

「助けを呼んだんだよ」

「なんですって!？」

それはちよつと意味不明すぎて、ワインを一気飲みですわ。

「で、一秒後には眼鏡キラッてさせた人が間に入って、『どうも、総務部袴田です。村井さん、僕の名前はご存じですか？ 僕ユウタって言うんですけど、雄が太いって書くんですよ。確かめてみます？』」

「おおお……おがふとい……」

「……って言って、話題逸らしてもらってたよ」

「へえ……」

めぐちゃんは空になったグラスに真っ赤なワインを注いでくれる。切り分けたチーズは私が苦手なウォッシュタイプを避けてくれてあった。

「そのあと村井さんは他に呼ばれて私も席立ったんだけど、えっちゃんの隣にはずつと袴田君が座ってくれてたよ」

「そ、そうなんだ……」

袴田君と話した記憶はまったくなくて……ちよつと禁酒が頭を過るんだけど。会社ではほぼ話したことないし、何話したのかとか全然想像できない……とりあえず袴田君ってどんな人なのか聞いてみなきゃ。

「ああ……へえ、そうですか。あー……うーんつと、めぐちゃんって袴田君どう思う？」

「どうって、典型的なメガネイケメンじゃね？ しかもいい人だし。だってバイトの私だって袴田君呼びだよ。なんだろうね、皆が袴田君袴田君呼ぶから呼んじやうよね」

「わかる、年上なのよね。でも総務部ってコミュ力高いイメージあるじゃん？ 袴田君は見た目総務部って感じしないよね」

それこそ陰キャっていうか、無口っぽいし、何考えてるのかわからないし。

「そうかな？ えっちゃんあんまり話したことないからでしょ？ 袴田君忙しくても話しかけんなオーラ。出さないし、声かけたらいつでも手止めて聞いてくれるし、要望も必ず『検討してみます』って眼鏡キラッてさせながら言ってくれるよ」

めぐちゃん、袴田君に詳しくてびびくり。正社員の私が何も知らないのに。

「めぐちゃん袴田君と話すの？」

「うち人事も総務がやってるから、私のバイト面接、袴田君だったんだよ。入社したあとも仕事はどうだとか、無理してないかとか聞いてくれるよ」

「へー……」

そうなんだ。袴田君っていろんなことしてるんだなーとか思っていたら、めぐちゃんが話を続けてた。

「確か袴田君って、私よりちょっと前に親会社の三神企画から来て総務部立ち上げたんでしょ？ うちの職場の環境改善のため、だっけ？ 威圧的に制することしないし、こんだけ皆から信頼されて馴染んでるってすごいよー」

「そう考えればそうだよね……：はあヤダヤダ。私自分のことばかりで、本当周りを見てないんだなあ」

そうだそうだ……三年前、三神企画の子会社すべてで行われた社内調査アンケートで、我ががGDCの従業員満足度は、数ある子会社を差し置いて、ダントツのワースト一位

だったそうだ。

従業員の満足度は顧客の満足度にも直結するというところで、業績に影響が出る前に職場の環境改善、社内政治を正すのを目的に、三神企画から出向してきたのが袴田君たち、今の総務部のメンバーだった。

ワインをクイツとしたら、めぐちゃんが止めてくる。

「で？ 袴田君と何があったの？ 酔っちゃう前に教えてよー」

「え？ なんにも……ないけど……」

「いや、隠そうとしても無理だから！ 飲み会後消えた二人！ 翌週現れる袴田君！！ 動揺する尾台絵夢!!! いつもものえっちゃんなら泥酔しても何食わぬ顔して出勤してくるくせに、『この間何があった？』なんて聞いといて、何もなは通らんよ」

「わわわわわわわわわわ!! わかりましたから!!」

洞察力鋭すぎるし、正直私もちょっと話聞いてもらいたいでかくかくしかじか話したら、可愛いお顔の眉間が寄ってしまった。

「はあああ!? 二人で裸で寝てて、何も言わずに帰って、ゲームしてエロ本読んで寝た？」

「違う違う!! TL漫画!!」

「言い方なんてどーでもいいし! どういう思考回路してんの、それ」

「いやだって、袴田君しゃべったことなかったし私処女だったし、テンパっちゃってね？ 起きた時の第一声とかわかんないし、寝起きブスだし、でも寝たふりたって起きるまで何していいかわからないし、寝てる間に屁してるかもしれないし脇の処理も甘いし、股の毛なんて気にもしてなかつ……」

「そんなのどおーでもいーんだけどお!!」

「テール、ドン!! ってされちゃったから、ヒヤアアって手で顔覆おいながら言う。

「だからほらあの、いつもと変わらない日常を送ればなかったことに……」

「なんねえな! こんなことあった? 服汚してさ、ああ汚れちゃった〜でもいつもどおりに着てたら汚れがいつの間にか元どおりに」

「ならねえな!! 汚れは汚れだよ!!」

「お前のしくじりを汚れとか言うな!」

めぐちゃんに、頭に手刀振り下ろされた。う、嘘……先に汚れて言ったのめぐちゃんじゃん!!

話合わせたのにおかしいなって頭さすってたら、めぐちゃんったら男前にワイン飲み干して新しいの注ついだあと、きゅつと唇を拭ぬぐってる。それでまだ納得いってないって目で言いってきた。

「どう拗こじらせたなら、そーなんのかわかんないんだけど!? で? 今日袴田君来てたじゃ

ん。なんて?」

「なんで勝手に帰ったのかって筆談で言われた」

「そんで?」

「責任取るから結婚してって」

「え? 責任? は? えっちゃん妊娠してんの!? エロ本なんて読んでる場合じゃないじゃん! 何酒飲んでんの! 吐け!! 健診の予約しろ!」

ワイングラス奪われちゃった。責任って……

「いやいや、そういう意味じゃな……え? そういう意味なの!!」

え!? 急に焦あせりが!!

「知らないし……まあ妊娠してたとしても、昨日今日でしかも袴田君がわかるわけないんだから、エッチしちゃったことの責任だろーけどさ……」

「……………だよね」

エッチしちゃった、か……おかしいな……自分のことなのに妙に実感湧かなくて……意味もなくジェルネイルのはがれてるとこ気になる、ガリガリ。

それ以上答えないで爪弄むってたら、はいはいどうぞってグラスを返された。めぐちゃんは面倒臭めんどくさいそうな顔で言う。

「で? どーすんの、付き合うの? えっちゃん気になる人いないでしょ」

「え、気になる人？ 気になるっていうか……営業の桐生さんは常々一般的にいいなとは思ってるよ」

「桐生さん？ 成績トップの？ うへえ。取り柄もない拗らせアラサーが理想ばつか高くてウザー」

「うるさいな、気になる人いるかって聞かれたから『桐生さん素敵だね』って言っただけでしょ。なんとも思っていないし」

「はあ？ そんなこと言ってる、朝隣で寝てたのが桐生さんだったら、今頃彼女面してたんじゃないの？」

「すいまっせーん!! 同じワインもう一本くださーい!!」

「なんだよ、人の心を読む力でもあるのかよ久瀬恵！ 怖すぎる！ 怖すぎるので聞こえないふりして、チーズ食べてワイン飲む！ 生ハムも食べてワイン飲む!! オリーブ食べてワイン飲む、ワイン飲む!! 飲む！ クラクラする!!」

めぐちゃんは冷たい目でワインを傾けながら溜め息ついてる。

「あーあーあー……いい年した女が、どうしてそういう逃げるようなお酒の飲み方しかできないわけ？ まあいいよ、袴田君と付き合わなくてもさ、ちゃんとしっかりした理由で断りなよ」

「ん？」

「だって袴田君って、絵に描いたような草食系じゃん。受付のギャルちゃんたちがああいう眼鏡好きみたいで『休みの日遊びましょーよ☆☆』って媚び媚びしてたら、袴田君眼鏡キラッてさせながら、『休日に興味に没頭したいので。今は女性には興味ないんです、ごめんなさい』ってキツパリ断ってたよ」

「へえ」

「それなのに、何故かえつちゃんには心許したんだからさ」

「うん」

「ゲームとエロ本に夢中で手が離せません、とかなしだよ」

「わかってるよ！ 中学生じゃないんだから」

「袴田君いい人だし、いちおし物件だよ。付き合ってみたら？」

「私のほうがめぐちゃんより年上なのに情けないなまったくもう!! ……って一気にゴクゴクやってたのが効いたのか、ちよっと楽しくなってきたなハハハ」

「いやいや、付き合うって私たちお互いのことふふふふ、まだ全然知らないしへへへ」

「そーだよなーんも知らないもんアハハハハハ」

「あれ？ そんな飲ませたかな」

「全然飲んでないよオホホホ。それにしてもドジっちゃったんだなあー。袴田君ちにポーチ忘れちゃってハハハどーしょ、返してほしーへへ」

「ふうん？　じゃあ連絡しとかないとね。まあとりあえずお酒はそこまでにしときなよ」

「え、なんで！　やだーまだ全然飲んでないのにーフオフオフォ」
 ……ってそこからへんまではハッキリ記憶にあって、そのあとすごい美味しい苺とリンゴのマリネ食べてワイン進んじやったのまでは覚えてるだけだ。

「んっ……」

気持ちいい揺れで目覚ましたら、車のガラス窓に寄りかかっていた。

え？　何？　車？　この匂い……は、ああ、タクシーかな。

まだうつらうつらしちゃう。んつと……胸のとこジャケットかかっている……手温かい……温かい？　ん？　なんで？　え？　に、握られてる！　誰!?

手ぎゅってしたら、窓の外見てる人がこつちを向いた。やだ、その顔……暗い車内で眼鏡めがねがキラッと光ってる。

「起きました？」

「はははは袴田……く？」

「はい、袴田です」

「お、お疲れ様です！」

「お疲れ様です」

「ななななななんで!？」

「会社に残って仕事をしていたら、久瀬さんから上司が酔い潰れたと電話があって」

「ええ………ああ!!　あのすみません」

「いえ、大丈夫ですよ。運転代行の手配とか二次会の場所とか……割とこの手の仕事もするんで」

「はあ」

「ああでも」

袴田君は握ってる私の手を自分の口のとこまで持っていくと、甲にちゅってしてきた。

「ヒヤッ!!」

「さすがに、店まで迎えに行つてタクシーに同乗して、手繋ぐなんてしませんけど」

「へ？　あ！　ごめんなさい！　あの、謝るので手離してもらってもいい……」

「ダメですよ」

「どして」

「今度は、お先に失礼します。って勝手に帰られたくないですから」

袴田君、にやって口角吊り上げてる。

「ヒグッ」

袴田君って笑うんだ！　しかもあの、なんか怖い系の笑い方。

手揺らしてみる。引っ張っても離してくれないから！

「えっと、あのこれってどこに向かっていますか？」

「家、ですけど」

「いえ？」

「俺の」

「降りる降りる降りる降りまっす!!」

無理だし！ と手振りまくるけど、強固すぎて外れません!! 効きませんね、とても言うように袴田君は笑顔を崩さずに言う。

「化粧ポーチ、いいんですか？」

「あ」

「動揺しているのは重々わかるんですが、逃げてばかりじゃ何も始まりませんよね」

「だって怖い……これから何が始まるんですか」

「逃げたり、目を伏せたり……自分の視界からなくなれば解決したと思う、尾台さんの間違った認識を改めることができると思います」

「おおおおお！ なんか袴田君先生っばい」

そうしたら袴田君、眼鏡キラッてさせて言う。

「いえ、総務です」

「総務格好良すぎじゃないですか！」

「尾台さんだって格好良いですよ、うちの営業が外でのびのびと仕事できるのは、他でもない事務さんのフォローあってこそですし。尾台さん評判いいですよ」

「え？ え？ そうですか」

あ、やだ。仕事褒めてくれたら、この人いい人☆ とか思っちゃう私、チョロイぜ。怖いゲージが下がって、ちょっと話に耳傾けちゃったりなんかする。

「尾台さん、納期は必ず守ってくださいよ。資料にミスも少ないし、無理な注文も聞いてくれるって営業の人言っていましたよ。頑張りすぎるのは心配ですけど、残業もしないように自分で仕事量調整してるし、素晴らしいと思います」

が、褒められ慣れてないせいで、いい返しが思いつかず、すぐ辛くなる不思議。

「ああ……あの……もういいです、恥ずかしくなってきました」

「あと、うちにそんな風習はないのに、社内文書の時は少し左に傾けて捺印してますよね。逆に社外の契約書で、尾台さんの印鑑が掠れているのを見たことがあります。いつも綺麗に真っ直ぐ、色濃く力強く押されています。どっちも好きですよ」

「ああ……ハンコ……上司にお辞儀してるみたいに見えるからいいって聞いてやってました」

「そんなの律儀にする人いませんよ」

「そっか……契約書は、私のハンコが掠^{ぬす}れてたらお客さんが不安になるかなって、気合
い入れて押しました」

「好きですよ」

「う」

さっき一回言われて流したんだけど、袴田君はもう一回言ってきた。

「好きです、尾台さんのそういうところ」

三回言ってきた。

でもなんて返していいのかわからない。袴田君は答えない私に何も言わなかった。

いまさら手繋ぐの恥ずかしく思えてくる。相変わらず手を離してくれないから、
ちよつと気まずくなつて外でも見ておいた。

ハンコなんてもう癖になっちゃつて気にも留めてなかったんだけど、そんな小さなと
ころでも気がついてくれる人がいるって嬉しいなあ。

でも、私だけ特別つてわけじゃないよな、仕事の一環？ めぐちゃんのこと気にか

けてるみたいだし。

そしたらクイクイと手を引っ張られたから、袴田君のほうを見る。

「仕事、辛くないですか？」

「え？」

「仕事内容ではなくて、人間関係とか」

「人間関係……」

「まだまだ古い体質から抜け切れてないですからね、うちの会社。俺は尾台さんの力に
なりたいたいで、なんでも言ってください」

あつもしかして、朝の葛西さんの件かな？ えっ、気づいて助けてくれた……？

「あの……今日はありがとうごさい、ました？」

「いいえ。だって俺の用事のほうが重要だったでしょう？」

袴田君はくすつて笑う。そしたらドキンつてあれ……なんかちよつと……あれ、変な
動悸^{どうき}……してる？

胸の鼓動が今まで感じたことのないくらいでどうしていいのかわからない。

「御茶ノ水で、尾台さんのおすすめのお店はありますか」

沈黙して固まったら、袴田君が話を振ってくれた。

私は昼お弁当持参だし、そもそも外食が苦手なんだ、とか逆に袴田君のおすすめのお
店の話したら……や、ヤバイ、いつの間にかタクシーが停まっていた。

お金を払おうと思ったのにカードを出されてしまうし、先降ろされちゃうしで、何も
できなかつた。

目の前にそびえる建物を見上げる。高級そうな高層マンション……帰るなら今しかな

いよなっと思った。時間は午後十一時になるところ、よかつたまだ今日だ。

どうする？ どうする私!! このまま男性の家に上がるってどういう意味なのか、わかっているのか私。でも結局、新しいメイク道具買ってないし、返してもらえないなら返して欲しいよな……

袴田君、めぐちゃんの話とちよつと一緒にいて話した感じでは、いい人っぽいけど……

エントランスに行くまでの植栽すごくて、わざわざ生えちやつてる、なんのため？ とりあえず花壇の縁にちよつと腰下ろす。袴田君はジャケットの袖に腕を通しながら首を傾げた。

「どこか具合でも悪いんですか」

「ああ……つと違くて」

「どうしました？」

なんていうか、私はこういう場面って経験ないから、すべて書物の知識なんですけど……でも曖昧が一番よくないから！

心配そうに顔を覗き込んでくる袴田君に、できるだけ真剣な顔で言った。

「仕事もプライベートも時短推奨のため、単刀直入に言わせてもらいますと！」

「はい」

「袴田君は私に下心がありますか!!」

「え」

「だって、私がすすすす好きなんですよね？ 今家に行ったら押し倒されたりするんで

しょうか！ 私にはそんな気ないんですが、世にあるTL漫画等では、のこのこ男の部屋に入ったが最後、組み敷かれ抵抗すると『はあ？ お前男が一人で暮らしてる家』に入ってきたといて、いまさらそれはねーんじゃねーの？ お前だつてこうされたいんだろ？ ほら顔真っ赤だよ？ ん？ 欲しいんだろ？ おねだりしてみろよ』つて言

われるんですね！ 私は本当にポーチを返して欲しいだけなのですが、袴田君は件の『はあ？ お前男が一人で暮らしてる家』男子なのでしょいか！ もしそうだとしても、

私は男の人に性欲があるのは当たり前だと思いますし、男の人に性欲ないと人間が絶滅してしまうので、性欲があるのはいいことだと思います！ なのでその場合、私は袴田君の性欲がおさまるまで、ここで大人しくポーチ待たせていてもよろしいでしょうか!!」

めっちゃ早口で言ったら、袴田君は口開けながら聞いてたけど、後半は笑っていた。「ふふふ、いいよ。尾台さん素直でいいですね、何回性欲つて言うの。大丈夫です。下心は理性総動員で抑えるので、お茶でも飲みませんか」

「飲みません！ 私の読むTL漫画ではそのような時のお茶には大体媚薬が含まれています！ 飲んで数分すると眩暈がして『あれれ？』どうしたの？ ああ……お薬効い

「尾台さん急に癖へきが出すぎだから。普段どんな漫画読んでるんですか、純愛系にしましょうよ」

ね？ 行きましよう？ って袴田君は手を握ってきた。「ほらこれアカンやつやないの!? 男は狼なんやで！」と心の中で謎おぼろの大阪のおかんが言ってくる（東京都出身）。

でも大きな手でガッチリ握られて、迷いのない袴田君の真っ直ぐな足取りに、そのまま連れていかれてしまった。

「何もしいって約束してくださいね」

「しますします」

「絶対ですよ！」

「ですよ」

一つ目のセキユリティーを抜けると、大理石のエントランスには鮮あざやかで見事な花が置かれてた。こんな時間でもコンシェルジュいて、その横を通過するにはまたセキユリティーカードが必要で……

これ軽い要塞ようさくじゃないですか！ 一度入ったら逃げられないぞ絵夢!! やっぱすっごく緊張してきた！

不安で手引っ張ったら、袴田君顔傾ななけてきて笑顔。あれこの人こんなイケメンだっ

たっけ。ってべつにお金持ってそう！ とか思ってないですよ!!

家の中に案内された。お靴ちゃんと揃そろえる。

「あれ、綺麗」

あの朝はカーテンが閉まってて電気もついてなくて、散らかってるってイメージだったんだけど、通された部屋は片づいていた。リビングだから？

「寝室も綺麗ですよ、ほら」

袴田君は隣の部屋のドア開けた。うっひよ!! そこ、こないだ起きたベッド!! あ、でも綺麗。

「片づけたんですか」

聞いてみたら、袴田君はちよっとムツとした顔になった。

「そうですね、っていうか、あの日荒らされたんですよ」

「え」

「尾台さんが家に着くなり『総務ってこんないいとこ住んでんのおお!! キイエエエ

エー!!』

「ひいい……!!」

「嘘です、いろいろあってって感じですよ。まあ気にしないでください、何も壊されてませんから」

立ち読みサンプル はここまで